

## 交換留学生と日本人学生との協働による日本語短編映画制作の試み

柴田あづさ（神戸市外国語大学）

神戸市外国語大学の日本語プログラムでは、交換留学生（以下、JLP生）へのカジュアルな日本語に触れる機会の提供と、日本人学生ボランティアとの交流及び異文化理解を目的に、毎学期、演劇の要素を取り入れた表現活動をテーマとする日本語の授業を週に1コマ（90分）設けている。そして、2013年度の春学期の全8回の授業では、JLP生の希望で日本語の短編映画の制作を行うこととなった。

参加者は、JLP生12名と日本人10名の計22名で、JLP生の日本語のレベルは、初級後期2名、初中級6名、中上級2名、そして上級3名であった。第1回の授業では、JLP生のみが参加し映画のジャンル決めを行い、3つのグループに分かれ、忍者映画と、ホラー映画、竹取物語のリメイク版の制作に取り組むこととなった。第2回の授業からは日本人も各グループに分かれて入り作品のイメージを共に膨らませ、その後の授業からは、台本作りに取り掛かった。台本が仕上がったグループは順次、衣装や撮影場所の確保、撮影を開始し、編集作業を経て、最終回の授業では学内で上映会を開催した。月に帰る前に居酒屋に立ち寄るビール好きなかぐや姫、JLP生の誕生会が突如殺人事件に変わるホラー映画「誘われなかった」、凝った編集や効果音、撮影方法で様々な修業の場面を映し出す「忍者物語」、どの作品も学生たちの自由な発想と、豊かな感性、編集技術が生かされており、鑑賞した人々を驚かせた。

上映会終了後には全員にアンケートを実施し、留学生は、自分たちのユーモアが日本の人々に理解されたことが嬉しかった、この活動を通しグループのメンバーととても仲良くなることができた、演じることは恥ずかしかったが、違う自分になれるのはおもしろかった等と述べた。また、日本人学生も、留学生と意見を出し合い1つの作品を作り上げられたことが嬉しかった、お互いについて語り合える関係になれたのがよかった等と感想を寄せた。一方で、話し合いで日本語の使用に消極的なJLP生がいたので教員がもっと注意をしてほしかったという日本人学生からの意見や、準備の時間をもっと長くしてほしかったという留学生からのコメントもあり、次回実施の際の課題としたいと思う。